

平成 27 年度 海外臨床研修報告書

「海外研修での変化」

研修期間：平成 27 年 2 月 28 日～3 月 13 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部 薬学科 5 年 110973410

岩田萌

海外研修へ赴き、私の価値観が変わったことがある。それは何事にも積極性が大切であるということだ。名城大学に入学した際は、自らが学ぶ目的を持って入ってきたため、様々な事を自分から進んで学ぶ必要があると感じていた。そのために薬学教育を受ける中で、学んだことを吸収できるように努力しなければいけないという気持ちがあった。その気持ちは薬学教育を進めていくうちにテストやその他に自分がやりたいことを優先させることで、少しずつ薄れてしまっていた。アリゾナ大学の薬学生たちは自分が将来こうなりたいという高い目標を持って学生生活を送っていることから日本の学生との間に積極性の違いを感じた。薬学生が実際に受けている授業を共に受講する機会があり、学生たちの様子を観察したが、授業中に自分のわからないことを授業中に中断して先生に質問し、わからなければそのまま授業時間をいっぱいに使って解説されていた。これらの授業に対する姿勢から、学生たちはわからないことを恐れずにその場で質問できるはっきりした気持を持っていることが感じられた。日本の授業中は授業を中断してでも学生が質問することはなく、授業後や授業外に個人的に質問をしに行くことが主である。アメリカのように集団で講義を受けているときは特に積極的に手を挙げて質問するということは少ないように感じる。自分がやらなくても誰かがやってくれると思うのではなく、自分が進んで行うという姿勢を見習うことができれば、様々な場面において自分の意志を持ってより多くのことを吸収できるのではないかと思う。自分の意見をしっかり持ち、自分から進んで発現できるという点はアリゾナ大学の学生のみでなく、アメリカの大学生たちが自主性をはっきりと持っているといえる。アメリカの薬学部に入るためにはほかの学部で2年以上基礎科目を習得する必要があり、コミュニケーション能力の面接など厳しい入試を終えて入学ができる。そのような厳しい条件をクリアして入った薬学生たちは、薬剤師になるという強い気持ちが授業に対する積極的な姿勢に表れていると感じた。アメリカの薬学生たちは留年をすることがほとんどない。これもそれらの気持ちから勉強に対する姿勢が表れていると感じた。彼らのような積極性を持つことで、日本の薬剤師にとっていろいろな場所で役に立つ機会を増やせるのではないかと考える。私自身もこの気持ちは強く持ち続けていきたいと改めて感じた。

また、アリゾナ大学ではランチミーティングという話を聞く機会があった。1年間、一定の料金を払うことで、お昼御飯を提供され、食べながら様々な職種の話を知ることができる。薬学生たちはランチミーティングに参加し話を聞くことによって、将来なりたい職種を見つける機会を得られる。このような機会は名城大学でもあり、昼食付きでないものであれば、卒業生の話や他職種の話を知ることができる。その機会を十分に生かすためにはこれらにはただ参加するだけでなく、その必要性を予め考えて参加することが必要である。そして、自分が必要と思う事柄に対して、必要な情報が入っている様々な機会を見逃さないようにする必要性もある。そのためには、常に自分がこの先の将来をどのようにしたいのかということを考えて、必要な情報を選別できるようにアンテナを張って置かなければいけない。アンテナを張ることで自分の欲しい情報を見つけ出すことができ、少

しずつでも意識して過ごすことができれば、自分の成長できる余地が増えていくと思う。

他には、机の前で聞く講義以外のフィジカルアセスメントを実践で行う授業があった。この授業では事前に肌や腎など身体の部位別に授業が行われ、その後出された症例について自分の考えをペア同士で自由に意見交換し、実際の薬剤師として働いている先生を患者役として、症状の聞き取り・診断を行ってその後のケアの方法まで説明していた。その後、先生から、診断からケアの方法までの評価を行われ、それらの内容をワードで作成し、テスト後すぐに提出していた。この授業を見学する中で学生をすごいと思った点は診断自体を1分から2分で行い、それに対して自分の意見をすぐにまとめてケアの内容にまで頭を働かせている点である。名城大学の薬学部ではこの授業と似たものとして薬物治療学という授業があるが、これはもう診断がされている病気に対してどのように治療を行うべきか、ということを考えている。診断からケアまでに責任をもって薬剤師自身がやるという自信が、自らが進んで行うという意味につながる要素の一つでもあると思う。アメリカの薬剤師はそのほとんどが薬局に就職するため余計に薬剤師一人にかかる責任が大きいのだろう。その責任の大きさが自信につながっていると考えられる。

もう一つ変わったことは教育現場にかかわっていきたいと思い始めたことである。アメリカの薬学部の学生たちは臨床に使う知識を学び、立派な薬剤師になるために学んでいた。それに対して教える立場の講師たちは、専任の講師として雇われている人は少なく、ボランティアとして、または他の職場で働く合間に教えに来ている。6回ほど授業の見学をさせてもらったが、学生も講師も授業を楽しくしたり理解しようとしたりする意識が授業の態度から感じられた。そのような授業を私自身もやり、患者さんの役に立てる薬剤師を育てることはとてもやりがいがあり、やってみたいと思えた。

今回の海外臨床研修ではアメリカの薬剤師や薬学教育の良い部分、日本の薬剤師との違いも含めて多くを学ぶことができた。現在の日本の薬剤師の役割は、診療方針の改定が進んでいることもあり、変化が続いていくと思われる。その変化についていけるようにするだけでなく、引っ張っていく気持ちを大切に、今回の学んだことを活かして、自分の考える力や積極性を今後も養っていきたい。